

民族舞踊文化



No.2

1989年4月25日

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F 電話03-583-3633(代)



▲韓国国立劇場稽古場風景(サルブリ)

一年のみち

黛民族舞踊文化財団
理事長 黛 節子

生まれて三度びの春を迎えたばかりのこの財団は、御陰様で成人式を迎えられるほどに成長いたしました。

皆々様に心から御礼を申し上げます。

地味ではございますが、日本の舞踊文化の発展はもとより、中国雲南省を中心とした、中国少数民族舞踊関係者との文化交流（中国舞踏家協会並びに雲南分会の協力）の絆は、ますます強くなって居ります。加えて大韓民國の招きでソウルを訪れ、文化関係の重要ポストの方達と明け暮れ歓談し、百年の知己を得ることが出来たことは、今後日韓両国の舞踊文化交流拡大の為の、貴重な礎を築くことが出来たと確信致して居ります。

以上のような状況から、来年度の財団の仕事は、中国及び韓国との文化交流が益々盛んになることと思われまふ。

上半期は再度韓国を訪れ、舞踊文化関係の交流並びに取材研究を行い、加えて古代に於ける日本文化(韓国からの渡来文化)の再認識を深めたいと思つて居ります。又八月には再び中国雲

南の少数民族に於ける舞踊の研究、並びに伝統的風俗習慣の彫り下げを行う予定で居ります。

舞踊文化という総合芸術の為の、この財団の真意を深く皆様に御理解頂き、舞踊文化のジャンルが活力に満ちて歩めますよう、是非一人でも多くの方々のお力添えを頂きたく心よりお願い申し上げます。

東洋の一角から国と国との舞踊文化を通じ、深く強い人的関係による文化交流の光の輪が、生き生きと輝きはじめたように思われます。

これも一重に皆様方の暖かい御支援の賜物と、厚く御礼申し上げます。

以上のような御報告の出来まふことを当財団の誇りとし、更に一層充実した研究成果が得られますよう、努力研鑽してゆきたいと存じます。

平成元年(1989)二月

招かれて 韓国

黛 節子

私が日本の踊りを始めた頃、一人の韓国舞踊家が居た。私は踊りが何であるか、舞踊とはどんなものか全く解らない頃であった。

彼女は“剣の舞”を踊った。舞台中央にライトが当たった。そこには両手に剣（さして長いものではなく、25センチ位だったろうか）を持ち、その剣を両膝前につき立て中腰のポーズを取った目鼻立ちの派手な美しい女性（グレーっぽいコスチューム）が浮き彫りにされた。太鼓（チャングであることは後で知った）がリズムを刻んできこえて来た。スックと立った彼女は女とは思へなかった。才気溢れる若者そのものだった。チャングに合せ、剣をクルリ、クルリ（その剣は手首のところから廻るように出来ていた）と廻し乍ら左に、右に、前後にそして廻轉、足踏み等々、ほとばしる若者の情熱を、惜しみなく発散させて踊り廻った。その折り折に、彼女のまつわりつく様な魅惑的な笑顔、特に目の饒舌さは凄いものだった。“こんな踊りを踊る人が居るのか、なんて素晴らしいのだろう！私もこんな魅力的な踊りが踊れるような舞踊家になり度い”。私は完全に彼女に魅了されてしまい湧き出る興奮を抑えることができなかった。

今回、私は韓国海外公報館より招かれて11月9日～15日迄韓国の旅をして来た。旅行の内容はソウルで文化活動をされている第一人者の方々とお逢いして、舞踊文化の交流交換をする事だった。

日数は短かったが、大きな刺激を受け、沢山の宿題を心の中に持ち帰ることが出来、私にとって又と得がたい密度の濃い旅行となった。

11月9日(水)

この夜は韓国舞踊協会主催新人入賞者発表会を参観。バレー韓国舞踊、創作舞踊等、多彩の舞踊を観る事が出来た。韓国舞踊協会理事長姜善泳女史とはいずれ日を改めて。

11月10日(木)

国立中央博物館観覧。これなくして日本の古代文化を語ることは出来ぬ思い。昼食は、国立劇場劇場長兼演出家許圭氏、と



▲天王門四天王像の一体



▲韓国舞踊協会理事長姜善泳女史と黛民族舞踊文化財団理事長黛節子

会食。大変日本語がお上手なので、私が常々舞踊文化に対して持つ夢や不満など心おきなく伝える事が出来、又、理解してもらふ事が出来た。カヤグム、コムング（韓国の琴）糸七本についてお話をした。彼のお嬢さん（12才）は現在コムング（これは主として男性が奏するもので非常にむずかしく力を必要とするもの）を勉強しているとのこと。

この日の昼食はタワーホテルの韓国料理だったが、料理全て大変美味、特に冷麺の美味しさは忘れられない（日本へ戻り再び食べたいと思うが未だ出逢えず。余談になるがイタリーのカプチーノの味が日本にないのと同じかな）

国立劇場の稽古場を見学。広いスペースに所せましと女性、男性の練習する姿は見事、“サルプリ”と“僧舞”を見学、この練習法は夫々が、自分の心で感じる“サルプリ”“僧舞”を手順を追って表現するのだそうである。

夜は宮廷料理海鄰館。海外公報部、文化交流部長趙倅均氏、姜善泳女史と会食。この夜はむずかしいお話はぬき。但し御料理は昼とは違って品格あるもの。食後別館に於ける韓国舞踊及び音楽の公演観賞。大変手ぎわよく、宮廷舞踊から農村舞踊まで解りやすく演出が行届き、又個々の楽器なども旅人に理解し易くまとめあげてあった。姜女史は大変気さくな女性。生の栗をおいしそうにポリポリと頂き乍ら、日本にいた頃の事など話して下さる。日本人の私より感覚的に日本を見ていなさる。すっかり親しくなり彼女のハーフコート（韓国スペシャル）を私にプレゼントとして下さった。仲々よく似合ふ

11月11日

国立國樂院 院長李勝烈氏とお会いする。私のパンフレットなど真剣に目を通して下さり、國樂院へ資料として並べさせて頂きましょうと云って下さった。

その後は舞楽のお話しになり唐楽、高麗楽等々についていろいろ説明して下さった。（私も舞楽を学んでいたおかげで大変面白く、自分の知識をより深くする事が出来た）

その他楽器の事になり偶然くごかの話にもなったが、楽器（実際に拝見した）はあるが今では演者がいなくて大変残念ですとの事。

そのあと掌楽課全明郁氏によって院内を見学させて頂いた。ここにも広い稽古場があり、専属の舞踊家が近々発表する「春香傳」の稽古をしていた。長い布を巧みに使って、それを舞台装置としたり小道具として扱ったりしていた。音楽は洋楽で、ロマンに満ちたものだった。

午後からは慶熙大学校教授、理学博士、大韓民國芸術院正会員、金白峰女史を大学のお部屋に訪ねた。“寒いから、寒いから”とガスヒーターをつけ、御自分も厚いボカ、ボカ真綿の入った上着を着てらした。“よく来て下さった”とハスキー・ヴォイスで握手して下さる。その手は決してなよなよとした軟らかいものではなかった。この先生の目から上が私の亡き母にそっくり

で、何かなし懐かしくなってしまった。まるで昔から知っているように、話しは踊り、踊り、踊りであった。私が「日本の踊りは概して二拍子が多い。然し韓国の踊りは三拍子の踊りが多いように思ふのですが」と出問すると、「そうです！」待ちかまえたように立上がりクタアーン（チャングの口唱歌）といい乍ら、呼吸の使い方と繊細なリズム感を振りと共に説明して下さった。初めて会った舞踊家黛節子にこんな大切なコツを教えて下さるその大らかさと、舞踊芸術にかける情熱の強さを私は感動なしにはうける事が出来なかった。「これだから芸術家って素晴らしいんだ！」私は心で叫んだ。（金女史は先般のオリンピックにはフィナーレの扇の舞の振付けをなさったとのこと）

そのあと金錦花女史（巫女）のお家へ。

この時は季節（秋から冬へ）の変わりめ（秋から冬へ）の御祈禱を行う日であった。特殊な韓国服を着けた男性が一頭の頭の大きな豚を殺し、その豚の血でドロドロになった野菜（多分じゃがいも）をかりかり食べながら豚にむかって呪文を唱え手ぶりする。あんまり気持ち良いものではなかったが、一生懸命気を張ってずっと見ていた。その豚へ皆がお金をあげて何か祈り出した。私も訳は解らないが韓国のお札をあげて豚におじぎをした。そのあと六帖程の部屋で子供が描いたような絵を貼りめぐらし、蜜柑菓子その他の食べものを並べてある台に向って老婆が祈りの踊りを始めた。同じ手振りのくり返しである。伴奏はチャング、ドラ、笛だった。別に神がかりという程のこと



▲天馬塚を見学する黛理事長

もなかった。御当主金錦花女史のお家芸「剣の踊り」は明日（12日）との事残念！

夜は高麗民俗舞踊研究院、院長丁明淑女史主催の晩餐会。この方達は日本の国立劇場の西角井氏、鷺尾氏などのお話をして非常に懐かしがっていらした。

12日、13日 土、日なので列車でいよいよ慶州に向ふ。何だか馬鹿にのんびりしてしまった。日本へ来て京都奈良を見る如く、慶州を見ずば韓国を訪れた甲斐なしとか。ヘトヘトになる程古蹟その他を観光させて頂く、天馬塚、天文台（1500年前）慶州鮑石亭跡、芬皇寺、仏王寺（天王門四天王）、吐含山仏國寺等々。昼食は慶州博物館長李蘭暎女史よりの御招待。韓国へ来て多種多様の御馳走を頂いたが、今日のお料理の品数は何と三十数種に及ぶ！さすが館長が女性だけあって、数々のお料理のいわれ、作り方など、こまごまと説明して下さったが紙面の都合上割愛させて頂く。館長が女性であるだけにどういう御仕事の方法を取っていらっしゃるのか伺った。まず発掘（慶州はどこを掘っても古代のものが出来来るそうである）又考古学を中心とした学問的調査、研究活動、又博物館管理、行政等々。

最近慶州には温泉が出るようになったので市の人々は華やかな温泉街にしたいという。ところが博物館側としてはそう所かまわず掘られたのでは考古学上さし障りが出る。そんな交渉の



▲慶熙大学金白峰韓国舞踊教授

くり返しが毎日の仕事です。文化と繁栄、むずかしい問題である。

さてこの博物館の入口にある鐘について。重さ27トン、大きさ1メートル50、12月31日人を選んで33人が33回つくだそう。AD771年奉徳寺から博物館へ。女性として館長になる迄の苦勞話をさりげなく話して下さった李女史に対して「日本の文化庁の文化部長も女性です」「おや日本にも？」「ええ遠山敦子部長といいます。今度是非逢いにいらして下さい」私は大きく胸をはって云った。私の脳裡には遠山部長のあの笑顔が浮んでいた。13日夕方飛行機でソウルへ。

14日、午前中は秘苑へ。李王家最後の宮殿。広い広い。昼はソウルホテル上の素晴らしいレストランで韓国国際文化協会Secretary General文道祥氏主催の昼食会。國樂院 院長、李氏 金舞踊教授 ソウル大学カヤグム教授の皆様、カヤグム、散調について、金女史が散調をどう舞踊化したか、又将来の舞踊文化について等々。皆堂々と熱気を帯びて意見交換、決して感情的ではない。日本にもこうした会合のチャンスを是非作りたい。会議などといふものでない会合、横の意見の交換と刺戟を。私はどんなにそれを思ったことか。日本に最もかけているのは巾の広さである。

夜はカヤグムの名手朴貴妃女史（重要無形文化財第23号）を訪ねた。すぐ楽器をとり出して演奏して下さい。彼女が弾くというのではなく、カヤグムの方が鳴り出すといふ感じだった。「譜面さえあれば何でも弾けますよ」と云い乍ら「桜」をああそうと知ったら好きな沖縄の譜面でも持ってくればよかった。

15日、朝ソウル・ホテルから一路金浦空港へ。広大なオリンピックの道路を再び通って。

ありがと韓国の皆様！

ありがと韓国……！

この様にソウルで活躍する皆様と深い深い絆を結んで下さり私の知識を高め、広めて下さった韓国に心からの敬意を表しま

▼ムーダンの行事のための生贄の豚



す。と同時に この過密なスケジュールを常時、御一緒に下さり、こまかいお心配りを注いで下さった海外公報館外信課、朴晳煥課長に厚い感謝の意をお送りします。そして韓国と日本との歴史の中で、古代からあざなわれた文化を我が財団に於て、舞踊文化の一端として燦然と輝くものに仕上げ、日韓の皆様にお目に懸ける日をお約束したいと願い心がける日日でございます。

1988年12月

編磬（ピョンギョン 日本語ではヘンケイ）

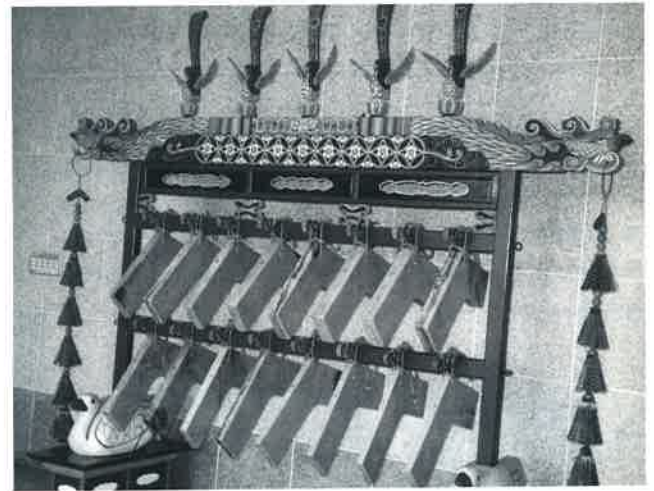
編磬は堅い磬石で作った16個のへの字型に曲がった石を、上下段各々に、8個ずつぶらさげた楽器で、編鐘と共に組み合わせ用いる。角槌で磬の長い方の端をたたく。高麗時代から使用しつづけてきたこの楽器は、朝鮮王朝の世宗時代に朴堧によって改良され、大量製作されるようになった。宗廟祭礼楽、文廟祭礼楽、洛陽春、歩虚子等の楽曲に用いられる。

編鐘

編鐘は16個の鐘を上・下段各々に、8個ずつぶらさげた楽器である。編鐘の大きさは同じだが、厚さは全部ちがう。厚いものは音が高く、薄いものは音が低い。つので作った角槌で鐘の下の部分に示した丸い陰をたたいて音を出す。編鐘は高麗時代から使われたが、朝鮮王朝の世宗大王時代に朴堧によって改良され、大量に製作された。現在、編磬と共に文廟祭礼楽、宗廟祭礼楽、洛陽春、歩虚子等の演奏に用いられる。



▲金錦花女史(巫女)の家に於ける祭りの場



▲編磬(ピョンギョン 日本語ではヘンケイ)

シャーマン、巫女、ノロ、ムーダン

黛 節子

おどりは型があつて形がない。人間それぞれが持っている心のようなものだ。人が死ねば心と肉体は無くなる。おどりの踊る人が居なくなれば全て消える。

形あるものは、そのままの姿で古代から現代まで、残され受け継がれてゆくことも可能だ。言葉も文字によって書き残すことが出来る。然し、おどりはこれ等のものとは性格が全く違う。

この不可思議な芸術の魔力に魅せられ、私の一生の殆どは、そのことの為に費やされた。更にこのおどりの持つ魔性に取りつかれた私を、もっと驚かせたことは、過去歴史上に名を止めたおどりの名手と言われた人達の背後をみると、必ず巫女の姿が浮かんできたことである。

おどりは人型（人間）に封じ込められた、数々の心の表現といえよう。煮詰めれば、人間の魂に感応する呪術といえるかもしれない。

こうした思いの数々が、私を巫女の勉強に駆り立てたのだと思う。現存する神社に残されたいくつかの巫女舞。又、北はギリヤーク、いたこ、から、南のノロに至るまで。

こうして習得した巫女の有り様を基に、歴史上名を残してい

る舞や踊りの名手といわれた人々の、復元を試みるおどり作りが始まったのである。つまり巫女を足掛かりにして、おどりの歴史を逆流し始めたのかもしれない。然し、この原点への旅立ち、日本文化の源流を問うという途方もない大きなテーマと、同義の様な気がしてきた。

以上のような理由から、今まで私が手がけたもの、或るいはこれから手がけようとするものについて、若干ここに書き記してみたいと思う。

1. 出雲の阿国

阿国は歌舞伎の祖といわれるが、彼女の出生には数々の説がある。とにかく歌って、踊って、演技するという、三拍子揃った型を最初に作り上げた女性には違いない。只、出雲大社の巫女説をとる場合、何故神楽巫女舞を踊らず、念仏踊りで勧進したのだろうか?(大社には、かつて勧進した事実はないらしい)。

私の考えでは、恐らく彼女自信、その当時流行したなまむみだぶつの六字の「となえ」によって、どんな罪業も救われるという、精神的流行思想を巧みに採り入れ、鉦をたたき、華やか

な演出表現によって各地を廻ったのだと思う。彼女は舞踊家として何世紀に一人の大天才であり、そしてその作品の殆どが、彼女の創作によるものだったのではなかろうか。

幸いなことに、その断片は僅かながら、地方の民俗芸能に伝承され、又初期浮世絵の絵姿や、沖縄のおどりのテクニックを通して類推することが出来る。

2. 静御前

彼女も又、遊君巫女といわれている。彼女は神泉苑の雨乞いで舞を舞い、見事雨を降らせその神懸かりぶりを発揮したといわれている。

彼女は、当時後白河法王も愛されたという歌の様式“今様”によって、男舞を鎌倉八幡宮で舞ったことは、あまりにも有名である。彼女の男舞は、母である磯禪尼より伝承されたと伝えられている。

私が静御前の舞の復元を試みたとき、一番苦労したのは、今様の形式も、男舞の形式も、現在殆ど残されていないということであった。唯一手掛かりとなったのは、神懸かりする巫女の軌跡から辿ってゆくことであった。

3. 幻の神功皇后

おどりの名手というわけではないが、大巫女として私が最も気にする存在であり、いつか取り上げてみたかった大きな対象である。この大巫女が存在を信じるか否か、半ば伝説とされているものの、決して捨て去ることの出来ない魅力ある存在である。従って、以下述べる材料の中から如何に舞台化するか、私にとって大きな宿題ともいえる。

“西の方に国あり。金（くろがね）銀（しろがね）を本（はじめ）と為て目の炎耀く（かがやく）種種（くさぐさ）の珍しき寶、多（さは）に其の国に在り。吾今其の国を歸（よせ賜はむ）”

爾に天皇答へて白したまひしく、

“高き地（ところ）に登りて西の方を見れば、国土（くに）は見えず。唯大海のみ有り”

とまをして詐（いつはり）を為す神と謂いて御琴を押し退けて控きたまわず。黙して坐（いま）しき。爾に其の神大（いた）く忿（いか）りて詔りたまひしく「凡そ茲の天の下は汝（いまし）の知らすべき国に非ず、汝は一道（ひとみち）に向いたまへ」。

爾に稍に其の御琴を取り依せて、那魔那魔邇（なまなまに）控き坐（いま）しき。故幾久（いくだ）もあらず御琴の音聞えざりき。即ち火を舉げて見れば、既に崩（かむあが）りたまひぬ。

——古事記より——



▲細男舞（せいのう舞）——春日大社若宮祭



▲八幡古表神社くぐつ—神相撲御神像

以上は神功皇后（息長帯日賣命）神懸かりし給い、仲哀天皇の崩れ給うそのくだりだが、ここからいよいよ皇后の戦が始まるわけである。そしてこれ等の話に関わりがあると思われる芸能、又は伝承として次の事柄が挙げられる。

- ・細男舞（せいのう舞、くわしおの舞）。
- ・八幡古表神社に伝わる、くぐつ細男舞、神相撲。
- ・古代氏族としての安曇族、隼人族、又、磯良丸等の問題。

こうした問題をときほぐすうち、いつか幻の神功皇后といわれたお姿が、私の目の前に現れてくるような気がする。然もこのことを更に深く追求していくと、古代に於ける我が国と韓国との関係が大きくクローズアップされてくる。今尚韓国にはムーダンと称ばれる、魂の発言者としての巫女が存在する。

このことを抜きにして、私はそれ以上前へ進むことは出来ない。

今回の韓国行きは、こうした私の想いを解きほぐす為の、第一歩だったように思える。これを機会に韓国各地に伝わるムーダンの研究を深め、我が国の巫女との比較、並びに類似点の有無等を知ることにより、私が心に抱いていた古代日本の芸能の一端が浮かび上がってくるような気がする。

私達日本人のアイデンティティーを求めて、私の新たな旅立ちが始まった。

華やかに開く、 日中舞踊文化交流の夕

象脚鼓の名手、岩宰氏招聘の記録

'88. 6. 1

訪日を招聘した岩宰氏（中国雲南省昆明市思茅地区民族歌舞団団長）からの連絡がない為、北京での出国手続きが完了したか否か心配していたところ、北京より電話が入り日本大使館に提出した書類不備の為、予定していた日に訪日出来ぬおそれありとのこと。

至急、外務省へ黛理事長自ら赴き事情を説明。13日の公演に間に合うよう訪日許可を要請。

'88. 6. 10

16時45分、岩宰氏と通訳の胡濱さん無事成田到着。

岩宰団長と黛理事長訪中以来、久しぶりの再会。悠好！悠好！一路、黛アート・サロンへ。その後、赤坂飯店にて財団役員、関係者を交えての歓迎レセプション。

'88. 6. 11

リハーサル開始。岩宰団長の象脚鼓と唄並びに踊り、劉宏軍氏の少数民族の笛、そしてフィナーレ全員の踊り等の練習。

日本側も黛理事長の指導でジノー族の「糸つむぎ唄」「竹竿舞」「竹筒舞」「太鼓の踊り」、ヤオ族「我愛一朵花」、アイニー族の「草帽舞」「銀鈴舞」、日本の民族舞踊「さいの舞」「ヒエツキ唄」等のリハーサルを行う。

'88. 6. 12

中国では春を知らせるのに太鼓を打つという。その喜びを太鼓に託して打つ岩宰団長の象脚鼓。笛の名手、劉宏軍氏等を交えての「楽しい空間」と題した第三部の最終リハーサル。

フィナーレ、ラフ族「バイ舞」の長時間にわたるリハーサルで、岩宰団長の右手は大きく腫れあがってしまった。その手を冷やし介抱し乍らのレッスンは、涙ぐましい程であったが、無事最終リハーサルを終了。

'88. 6. 13~14

赤坂草月ホールに於て 6 時30分より、
「秘境 雲南少数民族友好舞踊の夕べ」
一日中舞踊交流—
花開け・民族の踊り

と題し、公演を行う。

プログラムの内容は、第一部『中国雲南の少数民族の踊り』ジノー族「糸つむぎ唄」「竹竿舞」「竹筒舞」「太鼓の踊り」ヤオ族「我愛一朵花」アイニー族「草帽舞」「銀鈴舞」。

▼左より千昌夫氏、黛理事長、岩宰団長



発表会のための稽古場風景▲

象脚鼓—雲南の少数民族の楽器



第二部『日本の民族舞踊』「護身（拳舞、さいの舞）」「ヒエツキ唄」。第三部『楽しい空間』

人の心を打つ唄を歌う千昌夫氏と珍しい象脚鼓と笛の演奏。そして中国少数民族の踊りと、日本の民族舞踊によって構成された今回の舞台は、非常にバラエティーに富んだ楽しい公演であったとの評価を受ける。

終演後、岩宰団長、胡濱両氏黛理事長宅に招待。

'88. 6. 15

一行は16日のセミナーの為のリハーサルを行った後、銀座散策。

'88. 6. 16

赤坂、黛アート・サロンに於て、午後1時より

『雲南少数民族舞踊友好セミナー』開催
〈講師〉岩宰団長、〈司会〉黛理事長、〈通訳〉胡濱さん
テーマは

1. タイ族の言葉の成立。
2. タイ族の言葉を使った詩、歌の発生と成り立ち。
3. タイ族の音楽について。
 - a. 唄の形式、唄の数々。
 - b. 楽器について。
4. タイ族の舞踊について。
5. タイ族の舞踊と生活との関連性。
6. タイ族の民族舞踊と日本の民族舞踊との類似性。

以上の問題を主に数々の討議がなされた。

'88. 6. 17

一行は新幹線にて奈良観光に出発。天理市で古代史にその名を留める石上神宮へ。森宮司の案内で正式参拝の後、宝物や、



▲太鼓の踊り(ジノ族)

お社内部の建築様式等を見学。続いて奈良シルクロード博、東大寺、薬師寺等を参拝、見学。

今回は特に日本の田植風景に接したいという、岩幸団長の希望で農家を訪問。現在は機械化により、昔のような風景は見られなくなったが、田の土壌を見たり、ブドウ園や野菜畑を巡り農家の方達と歓談することも出来た。ライスロードの舞踊家達なのに、お米の炊き方が異なる故か、又はお米の質が違う故かともかく日本の御飯が大変美味しいと、大好評。

奈良より帰京後、黛アート・サロンに於て歓送パーティー。黛理事長はじめ、大野理事他多数の理事、評議員の方々の御出席を頂き楽しく歓談。色紙の交換、日本の珍しい御土産贈呈等があり、別れを惜しみ乍らも再会を約して無事閉会。

’88. 6. 19

黛理事長の見送りで、成田より16時05分発中国民航926便にて帰国。10日間の日程を無事終了した。



左より胡濱氏(通訳)、岩幸団長、森宮司(石上神宮)黛理事長

農家を訪問する岩幸団長 ▼



ライス・ロードの舞踊家一行 みちのくと信濃を訪問

8月初旬、(財)黛民族舞踊文化財団は、中国雲南省から中国舞踏家協会雲南分会の代表団(ライス・ロードの舞踊家たち)一行を招聘した。

代表団メンバーは次の通り。

龍翔<団長>中国舞踏家協会雲南分会常務理事(漢族)男性。

胡紫燕-雲南省文芸学校舞踏科副主任(漢族)女性。

饒均裕-雲南省文山州民族歌舞団副団長(漢族)男性。

特 姆-雲南省迪慶州民族歌舞団副団長(チベット族)女性。

怒学文-雲南省怒仁州民族歌舞団演出家(怒族)男性。

特に、チベット族、怒族の訪日は今回が初めてとのこと。



▲北上市長主催の歓迎レセプション

’88. 8. 5

ライス・ロードの舞踊家たち一行、中国民航 923便で来日。各自、色とりどりの民族衣装を身に纏っての登場に、空港ロビーの一般客の注目を集める。

18時30分より黛アート・サロンに於て歓迎レセプション。

当財団より黛理事長、大野理事、山脇理事、上田評議員、鹿海評議員、人間国宝・杵屋佐登代師、中国大使館・袁三等書記官、頼三等書記官、他多数出席され盛大に行われる。

ライス・ロードの舞踊家たちは、旅の疲れも厭わず踊りを数曲披露。

’88. 8. 6

一行はデパートでショッピングの後、当財団江戸理事の御招待で、ディズニーランドを見物。夜の催しも楽しむ。一同驚嘆の声を発し、時間の経つのを忘れる程の喜びよう。

’88. 8. 7

日本の民俗舞踊取材の為『北上みちのく芸能まつり』へ出発。

北上市教育委員会の沼山、斉藤の両氏、北上日中友好協会会長他、多数の出迎えを受ける。

最初に諏訪神社の神楽公演を取材。黛理事長と龍翔団長は、

特別インタビューで、日本の民族舞踊と、中国少数民族舞踊の友好発展を、今後の課題としたいと述べた。

ひきつづき、高橋市長主催による歓迎夕食会が催され、全員出席し大歓迎を受ける。

その後、祭りのパレード取材。「さんさ踊り」で、踊りがたけなわになる頃、当財団名のプラカードを掲げ、高橋市長を始め、黛理事長、ライス・ロードの舞踊家たち全員、踊りの中に加わる。やがて華やかに燃える篝火の中、北上地方特有の芸能「鬼剣舞」が、100名を超す大群団によって演ぜられ、日中友好の輪は一段と盛上る。

’88. 8. 8

この日、北上市民会館では『日中交流芸能公演』が催され、「二子鬼剣舞」第11団体の踊りを鑑賞。代わってライス・ロードの舞踊家達は、次の踊りを披露した。

1. 銅鼓舞
2. 点水雀
3. 刀舞
4. 芦笙舞
5. 白キジ舞
6. 熱芭

以上、現地スタッフの温かい協力で、素晴らしい公演となる。観客は珍しい中国の踊りに大喝采。

尚、その後、諏訪神社に於ても踊りを数曲披露する。

’88. 8. 9

諏訪神社に於て「鬼剣舞」各種、各様の奉納芸を取材する。

1. 国内鬼剣舞
2. 湯本鬼剣舞
3. 鬼柳鬼剣舞
4. 二子鬼剣舞
5. 岩崎鬼剣舞

ライス・ロードの舞踊家たちは、この後前日のプログラムの中から、4曲程選んで踊りを披露。

夜には北上川の花火大会を楽しみながら、北上に於ける民俗芸能取材旅行の幕を閉じた。

’88. 8. 10

北上への訪問を了へたライス・ロードの舞踊家一行は、続いて松本日中友好協会の招きで、信州松本に向かう。

穂苺甲子男会長他、多数の出迎えを受ける。

黛アートサロンに於ける公開レッスン風景▼



黛理事長より鹿踊りを習うライスロードの舞踊家たち▲



北上さんさ踊りに参加する光景▲

林友ホールに於て、当財団提供により黛理事長司会のもと、北上公演と同じプログラムで、中国雲南少数民族の踊りを披露。

松本で初めての中国少数民族舞踊公演ということで、報道関係者も多数集まり、珍しい振りや、美しい色彩の民族衣裳等、地元の人達の関心を大いに集めた。

公演終了後、役員、地元代表による歓迎会が中国料理店「桃林」で盛大に行われた。各々感謝と感想を述べ、和気藹々のうちに無事終了。

’88. 8. 11

この日は全員上高地を散策した後、穂苺松本日中友好協会会長他、多数の方々の“蛍の光”に見送られて、帰京の途につく。

’88. 8. 12

黛理事長、龍翔団長一行、文化庁を表敬訪問。

遠山敦子文化部長に面会。遠く雲南から来日した一行の労をねぎらう女性らしい御挨拶を頂く。

この後、黛アート・サロンに於て「公開レッスン」を行う。
日本で初めての雲南少数民族による、公開レッスンというこ
とで、会場溢れる程の参加者となる。指導曲目は次の通り。

1. マンロウ舞 (注：12頁参照)
2. 棒々灯 (")

黛理事長の司会で、参加者一同楽しいレッスンの一時を過
す。

'88. 8. 13

「公開レッスン」第二日目。

日本側の指導曲目は次の通り。

1. 鹿踊り
2. 花笠おどり

中国側の指導曲目は次の二曲。

1. 銅鼓舞 (注：12頁参照)
2. 点水雀 (")



▲トールン族の楽器

この日は遠く大阪からの参加者もあり、昨日に続き盛会。

レッスンの後、黛理事長の挨拶とレッスン受講者代表の御礼
の言葉があり、全員“蛍の光”を歌って終わる。

夕刻より当財団主催による、歓送パーティー開催。

黛理事長、安田理事、上田評議員、鈴木評議員、他多数出席。

中国料理を楽しみ乍ら、最後“一本メ”にて日本に於ける全
てのスケジュールを終了。再会を約して別れる。

'88. 8. 14

ライス・ロードの舞踊家たち一行は、素晴らしい足跡を残して、
成田発13時50分、中国民航924便で帰国の途についた。

▼上高地に於ける一行



岩宰先生の講演を聞いて

藤原 明人

雲南省のタイ族のことは中国映画『青春祭』などで知っては
いたが実際に会ったのは岩宰先生が最初だった。新聞で雲南省
の民族舞踊についての講演会があることを知り、黛アートサロ
ンを訪ねた。岩宰先生の話は当然、舞踏から始まるものと思っ
たがそうではなかった。先生は流暢な普通語（標準語）で先ず
タイ族自治州の気候、風土、自然環境から説き起こされ、タイ
族の農業、工業、風俗習慣、宗教、神話、歌謡、食物、楽器、
そして舞踏を語り、さらには孔雀や象、大青樹等の珍しい動植
物にも触れられた。通訳の胡濱さんも上手だったが岩宰先生の
話は言葉の壁を越えて聞き手の胸を打つものがあった。うまく
表現できないが多分それは祖国・郷土への深い愛情、タイ族と
その文化に対する誇り、そういったものだと思う。タイ族の舞
踏は（そしてどの民族舞踏にも言えることだが）決してそれ自
体で存在するものではなく、歌謡、楽器、その他の文化と同様に
たゆまない労働と自然への畏敬の中から生れてきた。タイ族の
舞踏を理解したいのならタイ族の文化の総体—タイ族の心を
先ず知ってほしい！岩宰先生の話は私はそのように聞いた。

雲南はとても豊かな自然に恵まれているという。780種以上の
鳥類（ほぼ同じ面積の日本は450種、30倍も大きい北米大陸です



▲シンポジウム「タイ族について」中央、岩宰団長

ら700種)。日本の約3倍、15,000種を越える亜熱帯の高等植物
の存在は話に聞くだけで驚異である。そしてそこにはそれぞれ
別々の生活様式を持った20を越える少数民族がいる。労働を愛
し、祭りを好み、歌を、舞踏をこよなく愛する人々がいる。か
つては日本にもあった歌垣、高床式住居、そして盆踊りにわず
かに名残をとどめている輪舞、これ等のものが雲南にはある。

稲作文化の発祥地は雲南だと説く学者がいる。稲作文化の担
い手たちは長い年月をかけて揚子江を下り、周辺に稲作を広め
一部の者は山東半島、韓国を経て九州北部に稲をもたらしたと
いう。その時から2000年余り、今日本は繁栄を誇り、人々は物
質文明を享受している。生活は豊かになったけれど何か大切な
ものをなくしたという喪失感を抱く人は多い。岩宰先生はその
大事な忘れ物を雲南から届けにきてくれたような気がする。

（黛民族舞踊文化財団・中国担当）

殯ななくさ

昭和63年もどうにか暮れ、64年を迎えた。黛民族舞踊文化財団の年中行事の最初は1月7日七草の宴である。かねてより篤き病の床に伏されて居られる陛下の、そのみ気にかかる日々であったのだが…。

7日朝電話のベルで起こされた。6時50分スタッフからである。さっと私の心に不吉な思いがよぎった。咄嗟にラジオのスイッチをいれる。

「天皇陛下におかせられては、今朝4時××分危篤状態におちいられ、6時33分お亡くなりになりました。」アナウンサーの張りつめた悲痛な声の報道が流れてきた。

とうとう亡くなられたのだ！どんなにかお苦しく、おつらい日々でいらしたとか、考えも及ばぬ忍耐の中で、死の病と闘われていらした陛下、お可哀想だった陛下。思いはたぎっても涙も出ない私であった。

とうとう殯ななくさになってしまった。私はそうなって欲しくない切に願う一方、徐々にその用意の方向へと歩む日が、何とつらく悲しかったことか…

古代、天照大神が岩戸にかくれられ、その前で舞い舞った天鈿女命。あれは殯の舞であったのだと近年私は思うようになっていた。人間天皇が神になられた今 私は舞踊する天鈿女の古事に習って舞う。それが舞踊家黛節子に出来る只一つのことなのである。今こそ天鈿女になれる私。陛下の御霊に殯の舞を捧げましたまじずめをさせて頂けたらこれこそ神が導いて下さる舞踊家として出来得る精一杯のこと。

報道は時々肅正の状態をつげる。歌舞音曲停止は勿論。

岩戸の前で踊ることを許され、堂々、殯という行事を許されたのは古代、ここに現代の考え方の差のある事を私は理解している。

民族舞踊家故に踊って魂をお鎮め申上げたいとの思いが…。一体どうする事が、民族舞踊家として真の日本人であり、正道なのか。

漸く私の心はきまった。

私の心の最も深いところで、祈念（私には鎮魂の舞心）をさせて頂ければ、人間黛節子に一番忠実なことなのではないか。

殯七草、70人余の方々がお集まり下さり、陛下の御冥福を祈り亡き陛下が希望されていた、平和の中に歩む日本を祈念しな



▲江戸英雄当財団理事と黛節子

がら進行した。

特に三井不動産重役 当財団江戸英雄理事が、陛下と過ごされた50年間の憶い出をお話し下さったのは、お集まりの皆様に大きな感銘を与えた。

昭和の年号 昭和64年1月7日最後の日がこの財団、本年の七草になったのである。

財団の歴史にとって特別な日となったのである。

因みに年号は平成と改められ平成元年は1月8日から始まった。

*殯とは古代、高貴な人の亡くなった時に行う御魂鎮めの儀式をいう。

1月9日
黛 節子



七草がゆを召し上げる方々



レモン忌に智恵子抄を踊る

智恵子没後50年記念「レモン忌」が高村光太郎記念会と(財) 黛民族舞踊文化財団の主催により1988年10月8日赤坂の黛アート・サロンに於いて催された。

プログラム

第一部 智恵子抄より

はじめの言葉

- | | |
|------------------|-----------|
| 1 美に生きる | 舞 踊 黛 節子 |
| 2 樹下の二人 | 朗 読 志賀広太郎 |
| 3 金 | ピアノ 池内 章子 |
| 4 あなたはだんだんきれいになる | |
| 5 あどけない話 | |
| 6 山麓の二人 | |
| 7 人生遠視 | |
| 8 千鳥と遊ぶ智恵子 | (舞踊) |
| 9 風にのる智恵子 | |
| 10 値ひがたき智恵子 | |
| 11 切紙細工 | (舞踊) |
| 12 荒涼たる帰宅 | |
| 13 レモン哀歌 | |

—休憩—

第二部 いま、智恵子に

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 智恵子遺珠 | 朗 読 梶沢佳乃子 |
| | 解 説 北川 太一 |
| 2 紙絵 スライド | |
| 3 スピーチ | 参会者有志 |
| | 司 会 北川 太一 |

終わりの言葉

智恵子抄の舞踊化は 何故出来たか

黛 節子

私が高村先生を駒込のアトリエにお訪ねしたのは昭和16年10月5日。何故？それは先生お作の新穀感謝の歌を舞踊化させて戴きたかったから。たしか駒込のアトリエは玄関はなく、正面の階段をトントンと二、三段上がって「御免下さい」と申上げたと思った、と左側の小さい窓が開いて「ほう」と先生のお顔が…或る方の御紹介があつてのことだったので、すぐ招じ入れて下さった。手にしたうすピンクのカーネーションの花束を「先生、おくさまに」と言って差し出すと、「ほう、ありがと 今日智恵子の命日です」と迎言って、壺にさして下さった。

それから私は臆面もなく時折先生をお訪ねした。あの頃国民服を召した先生は、時には「今豆腐の配給があるから一寸、とって来ます」と迎言って、戦闘帽をかぶり白いボールを手にして出かけられることもあった。又先生のアトリエの前の道にはたしかすずかけが街路樹として植えられていたように思う。私は先生にお目にかかる喜びで歌を口ずさんだりスキップをし乍



▲当日会場の祭壇

ら歩いたものだった。ところがある時、うかつにも(舞踊家たるもの)ステンノと転んでしまった。先生にそのことをお話ししたら「あなたは空ばかり見て歩いているから…ホホ、ホホ」とあの大きな手の長い指を、とくに親指をそらせてお笑いになったこともあった。

戦争は次第にひどくなり、アトリエも焼けてしまい花巻に行かれ、やがて太田村山口へ…。それ以来先生には太田村山口への、手紙でしかお話が出来なくなってしまった。戦時中、私は特別なモンペを作り智恵子抄と舞扇だけは肌身離したことはなかった。敗戦、母の失明、家の焼失等等、大きな苦労がふりかかった。が、そんな中でも私は智恵子抄を踊りたいという欲望が日々強くなってゆくのを押さえることが出来なかった。とうとう或る日勇気を出して太田村山口へお便りをした。先生から「貴女なら智恵子を下等にしてしまわないから」というお許しのお便りが届いた。そして私は大きな怖れと喜びの中に、昭和24年6月11日、昔の帝劇で上演することが出来たのである。

先生がこの世にいて下さった時に、先生から許して頂けたたった一人の舞踊家、わたしのこの自負は、私がどんなに堕ち込んだ時でも大きな救いになって下さっている。

一期一会、智恵子夫人没後50年のレモン忌、この二度とない今日の日に私は愛惜の心をこめて鎮魂智恵子抄を踊らせて頂けるのである。

昭和63年10月8日

舞踊詩 智恵子抄より2曲

舞踊解説

1. 千鳥と遊ぶ智恵子
2. 紙絵

松の花粉にけぶる九十九里
人間界と別れた智恵子
童心の中に遊ぶ智恵子は切絵にたわむれ、やがて身も心も浄められ観音のように見えてくる

▼智恵子抄(切紙細工)



賛助会員御芳名

(アイウエオ順敬称略)
63.12.30 現

有田平	修養	団
犬丸直	鹿海	信也
井浦芳	島村	昌子
石塚保	砂村	采女
石川隆	関野	智子
今村昌	武田	章子
池永好	武田	悦子
海野麻	竹崎	宇吉
江戸英	竹中	広夫
遠藤和	多田	侑史
遠藤照	徳山	素琴
遠藤昌	長谷川	房子
大野勝	林	三根子
帯谷瑛之助	平野	理定
小田部康	藤本	佳子
岡本春	藤原	明人
大井昭	本田	安次
岡田茂	穂苅	甲子男
梶沢佳乃子	細野	美智子
菅寿子	牧原	満男
神田千代	黛	智英
亀岡重	黛	莉香
杵屋佐登代	三橋	達也
北川太	森	武雄
木下純	安田	敬一
倉島攝子	矢倉	三郎
桑田美祢子	山口	道子
黒川洋子	山折	哲雄
見学玄	吉田	正
小松万里子	冷泉	貴実子
佐治敬三	藁谷	正子

財団法人

黛民族舞踊文化財団のあらまし

財団法人黛民族舞踊文化財団は、わが国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和六十一年三月文部大臣から設立を許可された団体です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡回公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者(音楽、振付けを含む)、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および東南アジア諸国の民族芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し(将来は資料館を設置して一般の利用に供することを計画しています)、また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これらの舞踊団との交流や、東南アジア諸国の民族芸能伝承者たちとの交流等、幅ひろい国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民俗芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申ししましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。

当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的を御理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申しあげる次第です。

つきましては、当財団には下記の通り賛助会員規程を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申しあげる次第です。

(財) 黛民族舞踊文化財団賛助会員規程

一、賛助会員とは、この法人の主旨目的に賛同して入会くださった個人・法人(団体)方々の名称です。

二、会費寄付の内容は下記の通りです(但し、年間会費として扱わせていただきます)。ア、個人の場合

個人会員	五千元以上
特別個人会員	十万元以上

イ、法人の場合

法人(団体)会員	十万元以上
特別法人(団体)会員	百万元以上

三、賛助会員の特典

ア、特別会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演会の切符御一名様御招待
- 2 「財団の宴」など種々の行事に御招待

イ、会員(個人・法人)

- 1 年一回以上公演会の切符御一名様御招待

なお、御入会くださいます方は、賛助会員会費寄付申込書に御記入の上、御返送いただきたく存じます。賛助会員会費寄付申込書は、当財団宛て、御請求くださいませ。領収書は、銀行にお振り込み下さいました後、お送り申し上げます。

1. マンロウ舞^{マンロウ}(独龍族)
2. 棒々灯^{バンバンテン}(壮族)

男女二人の踊り

男は日本の綾竹の様な40cm位のものを両手にもちそれをうち合せながら踊る、女は両手に日本の手ぬぐいの大きき位の薄い布をもって踊る

1. 銅鼓舞^{ドンクウ}(タイ族) 豊年を願ったり、祭りの時の喜びの踊り
2. 点水雀^{ディエンシユイチュエ}(怒族) 笛をふきながら雀が水を吸う様を表現化する踊り

民族舞踊文化 No. 2

1989年4月25日発行

〒107 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F Tel 03-583-3633

財団法人 黛民族舞踊文化財団

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE
MAYUZUMI BLD. 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, 107, TOKYO

発行人 黛 節子 編集人 大野明良